伝統・文化を題材とした地域学習の授業開発
―流鏑馬祭りを教材として―

B3E12030　田島　由香利

はじめに

本論の目的は、地域への愛情を育て文化を発展させる態度の育成を目指した授業を開発することである。教材として埼玉県入間郡毛呂山町の流鏑馬祭りを取り上げる。

伝統・文化を題材とした授業開発を目的とした理由は次の二つである。一つは、社会のグローバル化の急速な進行である。21 世紀の社会はグローバル化時代を迎え、資本・人・情報を世界中で共有することが可能となった。島国日本にもその波は押し寄せてきている。訪日外客数は年々増加し、2015 年の年間訪日外客数は 2,000 万人に迫る勢いであった[1]。また人口減少にともない外国人労働者の雇用が注目され始め、2014 年の外国人労働者数は過去最高を記録した[2]。

このようなグローバル化社会で生活していれば、当然異なる文化をもつ外国人と交流する機会も増えるであろう。したがって他の文化を理解し尊重する姿勢はますます重視され、同時に自国の文化を理解することが求められる。このことについて、相庭和彦は次のように述べている[3]。

> 自分の文化を理解していくことは他人の文化を理解していくことと同じ意味を持っている。社会教育の活動で自分史学習という学習活動がある。今までの自己を振り返ることで現在ある自己を理解するだけでなく、この方法を他者に転用することで他者を理解することができるのである。だから自分が育った社会の伝統文化を理解していく方法は、他者が育った社会の文化理解の方法に転化することができるのだ。これを逆さまに看ると他者の文化が理解できないと自己の文化が理解できないことにつながるのである。

平成二十年版学習指導要領へと改訂する際に中央教育審議会から出された答申に、異なる文化をもつ人々と共存することのできる人間の育成のため、伝統や文化に関する学習を社会科で積極的に行うことが「望ましい」と明記された[4]。

---

[1] 日本政府観光局ホームページ　統計データ（訪日外国人・出国日本人）（平成 28 年 12 月 9 日現在）http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/visitor_trends/。

[2] 厚生労働省ホームページ　「外国人雇用状況」の届け出状況まとめ（平成 26 年 10 月末日現在）http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000072426.html。

[3] 相庭和彦　2011　「グローバル化社会における『伝統文化』と生涯学習―『伝統文化の継承』とグローバリゼーションの関係性」『新潟大学教育学部研究紀要』第 3 巻第 2 号、pp.163-170。

[4] 文部科学省ホームページ　幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）（平成 28 年 12 月 9 日現在）

我が国の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度は、わが国や郷土の発展に尽くした先人の働きや、伝統的な行事、芸能、文化遺産について調べるなど、社会科、とりわけ歴史に関する学習の中ではぐくまれるものであり、その充実を図ることが望ましい。

他の文化を理解し共存していくためには、まず自国の文化に対する理解を深め、尊重する態度の育成が必要である。よって、伝統や文化に関する学習は国際社会のなかで生活していくためには不可欠なのである。

本論で伝統・文化の授業開発を目的とした二つ目の理由は、筆者が「日本の」、ではなく「地域の」伝統・文化を教材とした授業プランを開発するためである。その理由は第一に、体験的な学習活動を行うためである。社会科は暗記教科であると考えられやすい。そうした社会科のイメージを壊すため、子どもが実際に資料を見て、触ることができ、自分たちの生活にどのような関わりがあるのか実感できる学習活動を行いたい。そこで地域の伝統・文化を取り上げることとした。第二に、子どもたちが社会に出ていく際に郷土に対する誇りをもつことで、将来に希望と自信をもち生きることができると考えたためである。この点について、金井肇は次のように述べている[5]。

人間はまず、生まれ育った家庭に安心感をもち、存在感が満たされる。郷土、地域社会についても同様である。地域の自然環境や伝統・文化、地域の人間関係のあり方や地域の慣習、伝統行事などの中で子供は育ち、そこに愛着心をもっているのが普通である。…（中略）…生活条件よりも、生まれ育ったなじみのある環境、そこにある心の絆こそが大事なのである。

子どもたちが大人になり各地に羽ばたいていくとき、自らが育った地域のよさを知らずに自信をもって飛び立つことができるであろうか。日本のよさについての理解を深め、国に対する愛情を培うことが小学校社会科の究極目標である。その目標の達成のためには、まず子どもたちの最も身近である地域を愛する心を醸成することこそが必須ではないか。

伝統・文化学習としてこれまで多くの授業実践が行われている。しかし大畑健実はこれまでの伝統・文化に関する実践は、「地域の歴史や人物に関する知識を獲得する学習」に留まっており、文化を誇る態度形成や人間形成には結びついていないという問題点を指摘した。そのうえで大畑は先行実践を、教材である文化の取り上げ方と、授業展開方法という二つの視点から類型化している。さらに各類型の不十分な点を指摘しその成果に基づいて、文化価値の理解を深め、主体的に文化発展に取り組む態度形成を図るための学習に視点をあてた授業モデルを提示した[6]。

---

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/1290361.htm。

[5] 金井肇　2004　「伝統文化の尊重と愛国心」、『なぜいま教育基本法改正か　子供たちの未来を救うために』PHP 研究所、p.103-133。；但し、括弧内は引用者による。

[6] 大畑健実　2010　「小学校社会科における伝統・文化学習のモデル授業開発―第 6 学年単元『室町文化』における態度形成を視点として―」、社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第 22 号、pp.91-

しかしこの大畑の授業モデルは、伝統・文化のもつ価値の押しつけになっている。その文化がよい、ということが前提となって授業が進められているからである。その文化を全面的に肯定する子どもたちの姿勢に揺さぶりをかけ、新たな在り方を省察させ、提案させることこそ、子どもたちの主体的な思いや考えを大切にした態度形成につながるであろう。そこで授業プランの開発に当たっては、平塚理沙の規範反省型文化創造的学習を参考にする。それが子どもたちの「文化がよいという思い＝規範」に揺さぶりをかけ、現在の社会に合わせた文化を創造させようとするものだからである。

文化創造的学習とは、伝統・文化の価値を理解し、そのままの姿を継承していくのではなく、地域の様々な立場の人々との交流から新しい文化を創り上げていこうとする学習である。平塚は祭りの保存会の人へのインタビューを通して、祭りに対する思いと祭りに参加できない人・しない人の考えを獲得させる。守っていこうとする人々と反対の立場の人々の考えを知ることで、子どもたちのある「文化がよいという思い＝規範」を揺さぶり新しい在り方の祭りを考えさせている[7]。しかし祭りに肯定的ではない人々の考えを知るだけでは、問題を矮小化して捉えてしまうのでないか。例えば流鏑馬祭りを教材とした場合、「馬が町を歩くと道が汚れるから止めてほしい。」「祭りの掛け声がうるさい。」という理由で祭りに賛成できない意見が出てきたとする。これらの問題を解決する祭りの在り方を考えることが、文化を創造したと言えるのだろうか。

そこで渡部景子の論を取り入れる。これは他の文化と比較して自文化を見直していくという段階を取り入れたものである。渡部は教材とする祭りと、比較対象とする祭りの二つの祭りの良い面と良くない面を理解させる。そして比較対象とした祭りの良い面を取り入れることで、新たな祭りを子どもたちに考えさせている[8]。渡部の授業モデルを比較型文化創造的学習と呼ぶことにしよう。筆者はこの渡部の二つの祭りを比較する段階を、平塚の規範の揺さぶりの段階に取り入れる。しかし渡部は、お神楽とくじら船祭りという種類が異なる祭りを比較している。良い面と良くない面を比較する渡部の比較段階を踏襲するのではなく、同じ課題を抱えた他地域の流鏑馬を比較し、子どもたちが毛呂山町の流鏑馬祭りのこれからの在り方について考える手掛かりにさせる。文化存続のためにどのような方法が取られてきているのかを知り、自分たちの祭りではどのような方法が考えられるのか考えさせる。

本論では文化創造の観点を取り入れた態度形成を重視した地域学習を行うために、埼玉県入間郡毛呂山町の流鏑馬祭りを教材として取り上げた。流鏑馬とは、主に鎌倉時代から武芸の鍛錬の一環として行われたものである。戦勝祈願や戦勝御礼として神社に奉納された例も多い。毛呂山町の流鏑馬祭りも合戦勝利の御礼として奉納されたことから

100。

7 平塚理沙　2009　「小学校社会科における伝統・文化の授業開発―規範反省学習を目指して」、平成 20 年度北海道教育大学教育学部旭川校（卒業論文）。

8 渡部景子　2011　「伝統と文化に関する教育の充実を試みた授業開発―香取神社のお神楽を教材として―」、平成 22 年度文教大学越谷キャンパス教育学部（卒業論文）。

始まり、現在では地域に伝えられてきた祭りとして受け継がれている。しかし、始まった当時のまま、変わらなかったというのではない。およそ 950 年の間に、流鏑馬祭りは消滅したこともあるし、それがまた形を若干変えて復活してもいるのである。例えば開催日が変更されたり、祭礼区が変更されたりするなど、毛呂山町の流鏑馬祭りは時代とともに変容してきたのである。

このように様々な変化をしながら地域で受け継がれてきた流鏑馬祭りの学習を通して、地域に対する愛情をもち、地域の文化の発展に取り組もうとする子どもを育成することを目指す。そのためには「今ある文化がよいという思い＝規範」を揺さぶり新たな在り方を考えさせるだけではなく、学習を進めていくことで子どもたちに自分自身の変化を認識させることが必要であるのではないか。つまり、「今ある文化がよいという思い→課題の発見による規範の揺さぶり→新たな在り方を考える」という過程を経て、学習活動の前後で自分自身の考えが変化したことを自覚し、個人内評価をすることが大切である。

そこで筆者は OPP（One Page Portfolio）シートを活用することとした。OPP シートとは、従来のペーパーテストのように、数量的に知識・技能を図ることのできない総合的な学習の時間で活用されてきた学習記録シートである。シートの構成要素は四つである[9]。①学習の出発点としての学習前の知識や考えを明確にする。②学習過程の内容を示す学習履歴を明確にする。③学習の到達点としての学習後の知識や考えを明確にする。④学習履歴を振り返り自己の変容を意識化する自己評価を必ず行う。一枚のシートで学習活動を一目で振り返ることができるよう工夫がされているため、学習前後の変容を比べやすい。また教師として、学習履歴から形成的評価を行うことができるという利点をもつ。

以下、本論を次のように構成する。まず、伝統・文化に関する授業プランを分析し、従来の伝統・文化学習の問題点を明らかにする（第Ⅰ章）。次に第Ⅰ章で明らかになった問題点を克服するための理論を分析し、新しい視点を取り入れたものに改善する。ここでは流鏑馬祭りを教材として取り上げる理由についても詳述する（第Ⅱ章）。最後に、教材研究と開発した伝統・文化を題材とした地域学習の授業プランを詳述する（第Ⅲ章）。

本論の構成は、次のようなものである。

■　論文の構成

はじめに

第Ⅰ章　伝統・文化教育の先行研究について

　第一節　分析視点について

　第二節　分析基準と分析結果

　第三節　本論の目指す伝統・文化教育の授業モデル

第Ⅱ章　授業モデル及び OPP シートについて

---

[9] 堀哲夫　2004　『一枚ポートフォリオ評価　理科　子どもと先生がつくる「学びのあしあと」』日本標準、pp.15-16。

　第一節　流鏑馬祭りを取り上げる理由
　第二節　OPP シートの活用について
　第三節　授業モデルの開発
第Ⅲ章　授業プランの開発
　第一節　教材研究
　第二節　授業プランの開発
おわりに